

観世

令和五年 七・八月号

題字・二十五世観世左近 表紙デザイン・阿部壽

目次

観世会定期能(七月)	20
神戸観世会素謡会(七月)	21
京都観世会	
夏の素謡と仕舞の会(七月)	22
観世会定期能(八月)	23
荒磯GINZA能(八月)	24
京都観世会例会(八月)	25
京都観世会面白能楽館(七月)	
京都観世青年研究会(八月)	26

観世グラフ	1
	8

巻頭随筆・能楽とSDGs — 佐藤禎一 28

連載・謹訳 能の本(九十三) 布留(下) — 林望 30

【インタビュー】国立能楽堂開場四十周年を迎えて — 佐藤和男 38

【特集曲】姨捨能〈姨捨〉と金春禅竹の「月」 — 倉持長子 44

連載・能に描かれる愛のかたち(八)

白拍子たちの愛 — 松村栄子 54

窓 — 64

催し案内 — 67

七月・八月の番組 — 68

令和5年下半期

定例会公演予定 — 92 (3)

令和5年観世会

下半期予定番組 — 94 (1)

観世グラフの記録

編集後記 — 96

能〈姨捨〉と金春禪竹の「月」 ● 倉持長子

能〈姨捨〉の研究史を概観すると、「わが心なくさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て」（『古今和歌集』）をめぐる『俊頼髓脳』の記事および中世古今注釈書による影響を認める論や、「姨捨山の月」を詠む伝統的な和歌のあり方がその構想に関わることを明らかにした論²、さらには室町期以降の舞や演出の多様なバリエーションを紹介する論³など、さまざまに展開されている。中でも最も多く論じられてきたテーマは、その作者を世阿弥とするか、あるいは金春禪竹とするか、という問題である。

『能本作者注文』をはじめ作者付はすべて〈姨捨〉の作者を世阿弥としており、『申楽談儀』に後場「月に見ゆるも恥かしや」の演出についての具体的な注

意が見えることから、かつては世阿弥作と断じられていた⁴。しかし、小西甚一氏⁵が本曲の作風、特にクリ・サシ・クセの月光の描き方から世阿弥作に懐疑を示して以来、二十代半ばの若き金春禪竹の作品という論が推し進められてきた。禪竹作〈芭蕉〉や〈定家〉と共通の「円環様式」を見出した山木ユリ氏⁶は〈姨捨〉を「禪竹様式の完成点として存在している」と位置付けた。さらに、間狂言に姨捨伝説の筋書きを説明させる、本説と関わりなく懐旧の舞が舞われるなどの禪竹作品の特徴から、三宅晶子氏⁷によつて積極的に禪竹作説が唱えられ、それを受けて味方健氏⁸からも本曲における禪竹好みの詞や定家への傾倒が指摘されるなど、近年、禪竹作説が優